

『この平凡な日常の果て』

「ねえ、聞ってる？」

ソファア席側に座る大崎茜^{おおさきあかね}が言った。

「何が？」

通路側の椅子に腰掛ける大崎香介^{おおさきこうすけ}が言葉を返す。

「このスニーカーの色、白と赤どっちが似合うと思うか聞ってるの」

携帯電話の画面を示す彼女の言葉を耳にした香介は、ソファア席側に座ろうとした過去の記憶に着目していた。

少し前、ハンバーガーショップに出向いた大崎香介と大崎茜。自宅から徒歩十分圏内に位置する飲食店。店頭の自動扉が開き、その空間を当然のように跨ぎ、待ち構えていた女性店員の『いらっしゃいませ！』という業務用の活気に満ちた言葉に二本の指を立てて『二人です』と答える香介。

時刻は午前十一時を過ぎたところ。開店から間もない店内は閑散としていた。後一時間もすれば人数が増え、賑わい始めるのだろう。二人は、『お好きな席へどうぞ！』と招かれた。先頭を歩く香介は、茜に訊ねることなく受けた言葉のまま好きな席へと向かい始める。ハンバーガーに寄り添ったBGMがスピーカー越しから聞こえてくる。この曲、誰が選んだのだろうか？ 誰かの独断？ それとも皆でミーティング時間を設けたのだろうか？ 関心の薄い物事を頭の中でなぞりながら店内を見回す。テーブル席が七つ、カウンター席が五つ。食欲をそらされた香介のお腹が音を立てた。焦点を合わせた。四人掛けの窓際のテーブル席のソファア。座り心地がよさそうだ。香介は、足を踏み入れようとする。

「ちょっと待って」

ソファアまでもう少しのところ、背後から聞こえてきた茜の声で立ち止まる。

「普通、レディにソファア席を譲るのが紳士でしょう？」

茜の言葉を受けた香介は、一言も発することなく方向転換。通路側の椅子に腰掛ける現実がやさしく彼を包み込んだ。

*

「白の方が無難じゃない？ でも、赤はインパクトがあるのよね」

ソファアの座り心地が気になる香介は、茜の話に親身に耳を傾けていない。

「どっちがいいと思う？」

別に俺が履くわけじゃないからどっちでもいいよ。なんていう本音を伝えるわけにはいかないから無難な言葉を探し求める。「どっちも似合いそうだな」

「そうなんだよね」香介に向けていた携帯電話の画面を自らの手元に戻し、人差し指で上下にスライドする茜。「どっちも可愛く見えてくるよね」

彼女の中で、答えはもう決まっているはずだ。

「でも、私はこのブラックにするって決めてるの」

カラーもブランドも異なるスニーカーが映った携帯電話の画面が香介の視界に飛び込んでくる。ブルーライトがいつもより眩しかった。

「ていうか、明日の午前中に届く」

ほら、もう届く日にちまで決まっている。

「でもその時間帯家に居ないから荷物受け取っというて」

あら、もう受け取る人物まで決まっている。

「この後、彼氏んち行ってそのまま泊る予定だからさ」

そろそろ注文したハンバーガーがテーブルの上に届きそうだ。

「どうせお兄ちゃん暇なんでしょ？」

そりゃあ、暇ですけど。

「よろしく頼んだ」

いいよ。と承諾する前にすべてが決まっていた。

香介と茜の間では、このようなやり取りがもう何十回も繰り返されている。

香介自身はインターネット上で買い物をした経験が一度もない。それなのに玄関先で宅配の荷物を受け取った回数は、茜のそれよりも遥かに上回っている。そもそも香介は三年前、実家に舞い戻ったと同時に携帯電話の契約を打ち切っている。彼の連絡手段は、自宅に引かれた固定電話のみ。最低限の繋がりを保ちながら日々を生活している。彼の思考回路には、イ

インターネット上で買い物をするという選択肢が存在しない。買い物をするときは、靴を履いて自宅から外へ出掛け、移ろう景色を感じながら目的地へと足を運ぶ。その際、見ず知らずの人間たちとすれ違い自分とは直接関係のない言葉が聴覚を刺激してくることもある。目的地にたどり着いた彼は、実物を手に取りお会計を済ませ持参したエコバックに仕舞い込み、帰宅する。

「それどんな味？」

茜の言葉がハンバーガーショップに居座る現実を知らせてくれた。

香介の本心としては、そのソファーどんな感触？ と聞き返したいところではあるのだが、そこはぐつと堪える。長年の経験から答えて貰えずに自分が傷つくだけであることを心得ているのだらう。香介は手に持つチーズバーガーをソファーに座る茜に黙って手渡した。それと引き換えに彼女が注文したベーコンレタスバーガーが彼女の手元から目の前のトレイに横たわる。どうやら交換するわけではないらしい。手持無沙汰になった香介は、テーブルに居座るフライドポテトを一本手に取り口の中へ運んだ。そのとき、備え付けのケチャップには一切目もくれなかった。

「全部食べちゃってもいい？」

まだ一口しか食べてないんだけど。と浮かび上がった想いがすぐに消えて、まあ何が何でも食べたいわけでもなかったからいいか。と思えた香介は肯いた。

さすが自慢のお兄ちゃん！ なんて返答を期待してみた彼だがすぐに、期待した分だけ痛い目見るぞ。と過去の経験が教えてくれたから目を瞑った。案の定、美味しそうにチーズバーガーを頬張る茜の口から放たれたのは称賛でも感謝でもなくただの咀嚼音だった。

ひと回りも年の離れた妹が美味しそうに食べる姿を見て香介は、このチーズバーガーは幸せものかもしれない。と思い込ませようとしてきた思考に従った。それから揚げたてのフライドポテトを二三本食べて見せたが、彼の記憶には残されなかった。今まで何百回何千回と反復してきた動作だからこそ意識する必要がなかったのか。それとも注文されたのに手を付けて貰えないベーコンレタスバーガーへの同情心で胸が埋め尽くされていたのか。はたまた唐突にベトナムの首都を思い出したくなってそこに意識が費やされたのかは分からないが、気がついたとき彼は数本のフライドポテトを食べ終えた現実だけを掴み取っていた。

しばらくしてチーズバーガーが茜の胃袋に納まり、彼女の視線がベーコンレタスバーガーへ向けられたことに安堵する大崎香介。

「私、今の彼氏と結婚する予感」

安堵したのも束の間、茜はベーコンレタスバーガーから視線を逸らし、フライドポテトに手を伸ばした。備え付けのケチャップをたっぷりディップしてから口の中へ放り込んだ。

茜の一連の動作を見届けた香介の脳裏には、君はまだ大学生じゃないか。という世間一般的な思惑が浮かび上がったが、それよりも今は彼女の目の前に横たわるベーコンレタスバーガーの心情が気になって仕方がない。しかしその思考を深く掘り下げさせないように過去の記憶が横やりを入れてくる。

今の茜の言葉、どこかで聞いたことがあるぞ？

フライドポテトにディップされたケチャップが茜の口元にわずかながら残されている。香介は、ケチャップ付いてるよ。と伝えた。どこ？ と返ってきたから、ここ。と自分の口元に人差し指を当てる。ここ？ と訊ねてきた茜に、いや反対。と伝えてようやく彼女のケチャップが口元から居なくなった。

「彼氏のこと聞きたい？」

茜の口元から零れる愛する想いが野に放たれる。香介は彼女の喜々に満ちた声を耳で感じ取る。好きな仕草や態度、どんな言葉をくれて、どんな思いやりを見せてくれるのか。自分のことを、あーちゃん。と呼んでくれて、喧嘩した後の言動にも惚れ惚れしちゃった。

結婚がどんなものか分からないけど、彼女の思い描く未来は輝いている。香介は、素直に受け取った。恋人の話をする彼女の目は透き通っていて眩しい。けれども、それと同等の危うさが瞳の奥の隙間からこっそりこちらを見つめている。

「てか、なんでチーズバーガー頼まなかったの？」

香介は、横たわりつづけるベーコンレタスバーガーを見つめながら話題を変えた。

「誰かが頼んだ物の方が美味しく見えるときあるでしょう？」

「隣の芝生は青いなやつ？」

「チーズバーガーは青くないけどね」

「どちらかと言えばベーコンレタスバーガーの方が青い」

「お兄ちゃんも言うようになったね」茜は目の前のベーコンレタスバーガーを手に取り香介に捧げた。「これ、食べてもいいよ」

香介は、ありがとう。と言って彼女からベーコンレタスバーガーを受け取った。

「お兄ちゃん、恋したことあるの？」

香介の脳裏に特定の女性の姿が映し出された。

「その人たちのこと本当に好きだった？」

映し出された存在が、音もなく消えた。

何も答えない香介に向けて茜が口を開く。「私は、大好きだと言い切れるよ」



「お母さんは？」

はやまみどり

葉山翠が冷蔵庫を開けながら言った。

「沖永良部島だよ」

自宅の座り慣れたソファ―に腰掛ける香介が言葉を返した。

「まだ居るの？」

「相当気に入っているみたい。昨日電話が鳴ったけど、電話越しの声が活き活きしてたからなんかこっちまで元氣貰えたよ」

「本当、自由気ままで羨ましいよ。私とは真逆の暮らしだ」冷蔵庫から緑茶を取りだす翠。
「香介なんかいる？」

「いない。と言う代わりに、水の入ったグラスを掲げてみせた。

冷蔵庫近くにある食器棚からグラスを取りだし緑茶を注ぐ翠。七分目まで満たされた辺りで注ぐのをやめ、冷蔵庫の元の位置に戻した。彼女は無意識的にグラスを手に取り歩きはじめる。一瞬、部屋の照明に視線を移し焦点を合わせたが、何かを想像する前にソファ―にたどり着いたから潔く腰を下ろす羽目になった。

「茜は？」

「さっき一緒にハンバーガー食べに行ったよ」香介は、翠を受け入れるように水を一口飲んだ。「食べ終わったらすぐに恋人のところへ飛んでいったけど」

「あいつ、翼生えてたっけ？」

「嘘だよ」

「真面目に答えないでよ」

「じゃあなんて答えればいいのさ」

「そんなの私に聞かないでよ」

テーブルを挟んで向かい合わせのソファ―席に座る香介と翠。
三つ年上の姉を前に香介は通常運転、狼狽えるしかなかった。

「茜は母さんの血を受け継いでいるよね」香介が食べるつもりで置いていたミルクチョコレートを手元に引き寄せた翠が言う。「あの二人は本当に自由だ」

二人ではなく、三人だ。

「私も自由気ままに死ぬまでのんびり暮らしたい」板状のミルクチョコレートを一口齧りそのまま手元に置いた翠がつづける。「二人ともなんでもなんに自由になれるのかな？」

だから二人ではなく、三人だ。

「私、この人と結婚する予感って言ってたよ」

「誰が？」と言った翠は横たわるミルクチョコレートに視線を向けることなく再び手に取った。「もしかして茜？」

彼女は香介が食べるはずだったミルクチョコレートが気に入ったみたいだ。

「また馬鹿なこと言って」存分にチョコレートを味わったその勢いで緑茶を飲み干す翠。グラスをテーブルに置くと同時に言い放つ。「結婚なんてするもんじゃないよ」

同じタイミングで水を飲み干した香介。ソファから立ち上がり翠に問いかける。「コーヒーいれようか？」

翠はソファに腰掛けたまま先程焦点を合わせた照明に目を向けた。「このチョコレートと合うかもね」

香介にとってコーヒーを淹れる時間は至福のひと時だ。習慣の中に身を投じ、思考の整理を感じ取る。細かい心情の変化を機敏に察知し、安心する。

翠にとってコーヒーを待っている時間は至福のひと時だ。日頃の家事育児から解放され、心持ちが自分自身に向けられる。なにも背負うことがない、至福のひと時。

「ミルクだけでいいんだよね？」

「今日は砂糖も一粒入れて貰おうかな」

至福のひと時を味わう香介の元に過去の記憶がやってきた。

八年前、彼がまだ父親の教えに従い自由気ままに飛び回っていた頃、当時二十八歳を迎えた姉から唐突に電話が掛かってきて、『私、今の彼氏と結婚する予感』と伝えられた記憶が色濃く蘇った。普段連絡もしてこない姉だったから強い印象を受けたのを憶えている。

ハンバーガーショップでの妹の言葉は、そっくりそのまま姉から受け継いでいたものなのか。そりゃあ、どこかで聞いたことがあるはずだ。

「血は争えないな」

思わず漏れた香介の呟き、翠の耳に届く前に消えた。

茜の奴今頃恋人の家で幸せを感じているのかな。そうだったらいいな。なんていう想いがコーヒーを淹れている香介の頭の中で巡っている。

「このチョコレート美味しいね」

ソファーに座る翠の表情は穏やかだ。

「まだあるけど食べる？」

跡形もないミルクチョコレートの姿を目にした香介が返した。

「いや、これ以上食べると太りそうだからやめとく」

二つのカップにコーヒーを注ぎ終えた香介が翠の元へ向かう。

「ありがとう」

「どういたしまして」

テーブルに二つのカップを置く。香介はまだ座らない。冷蔵庫へ足を運び、ミルクチョコレートを一枚手に取り、翠が座る向かい側のソファーに腰掛けた。

「あんたが淹れるコーヒー美味しいよ」香介が持つミルクチョコレートに視線を向けた翠が言う。「コーヒーショップでも開けば？」

香介はブラックコーヒーを一口味わい、首を横に振った。ミルクチョコレートは、コーヒーカップの隣でちょこんとお行儀よくしている。

「まだまだ父さんには敵わないけどね」と、翠が言った。

「死んでも敵わないよ」

「確かに」翠が本音を洩らした。「香介が淹れるコーヒーは世界で二番目に美味しい」

香介は二口目のブラックコーヒーを味わってから言った。「ありがとう」

この空間は今、翠がセレクトした音楽がBGMとして流れつづけている。

テーブルに横たわるミルクチョコレートに視線を向けた翠が言う。「食べないの？」

「食べるよ」

「半分貰ってもいい？」

香介は板状のチョコレートを半分に折り、翠に手渡した。

「ありがとう」受け取った翠は早速一口齧った。「茜、大丈夫かな？」

翠の言葉を耳にした香介、当時二十八歳の彼女から伝えられた内容は口にしないと固く

決めた。

「私には全然相談してこないもん」

「忙しくしてるから言いづらいんだよ」

「あいつ私が口うるさいこと知ってるからね」

なんだ、分かっているんだ。

「だから母さんにも言わないでしょ？」

そうだね。という言葉は胸の奥に仕舞っておく。

「父さんは連絡がつかないところに居るし」

今頃、何やってんだろ？

「だからあんたにすべてが回ってくる」翠は又、ミルクチョコレートを齧った。「心が広いからね」

「茜の話は興味深い」

「あいつ恋人出来たら毎回言ってるじゃない？」翠の語気が強くなった。「結婚するって」

「もしかしたら言ってるかもしれない」

「正直、結婚する気なんてなかったよ」と、翠が言った。

私、今の彼氏と結婚する予感。

「ずっと独り身だと思ってた」

予感が見事に的中した人間が香介の目の前に座っている。

「私も言ってみたかったな、そんな言葉」

過去の発言なんて忘れてしまえばこっちのもんだ。とでも言わんばかりの堂々たるや。

「結婚なんてしなきゃよかった」

宙を眺める翠、しばらくそこから目を離さなかった。

「ぼちぼちやってるんでしょ？」と、香介が言った。

「洋^{よう}が居るからなんとか成り立っているけど」

「子供の存在って大きいね」

「ねえ聞いてよ……」

葉山翠の背中辺りにあるスイッチが押された。そこから数十分、彼女の溢れ出る想いが言葉に乗り移り、日頃の鬱憤として姿を現した。調和を重んじるために堪えた言葉の数々が、今この場所で一斉に放たれる。愚痴、愚痴、旦那への愚痴。枝分かれした愚痴がママ友へ飛び移り、ショッピングモールでの些細な出来事まで思い出させた。彼女の扱う言葉には棘が入り混じっている。しかしその言葉の本質は、寂しさで埋め尽くされているのかもしれない。

その間、翠は二杯目のコーヒーに手を伸ばし半分に折られたミルクチョコレートを綺麗に食べ終えた。少しして香介が食べるはずだった残りのミルクチョコレートを視線を向け、もう半分に折ってもらい舌の上で味わった。「どう思う？」

「日頃の鬱憤は全部ここで吐き出せばいいと思うよ」香介もつられるようにミルクチョコレートを舌の上に乗せた。「現代は、どこかで発散する場所が必要だ」

ミルクチョコレート、ようやく香介に味わってもらうことができ、とろけた。

ちらりと時計に目をやった翠の表情は晴れやかだった。「そろそろお迎えに行かないと」彼女が溜め込んだ鬱憤、きれいさっぱり姿を消した。

「来週の土曜日、洋預けてもいい？ 友達とランチに行くんだけどさ」

ほら、切り替えが早いこと。

「昼前には預けに行けると思う」

あら、もうすでに決まっている。

「香介どうせ家にいるんでしょ？」

そりゃあ、居ますけど。

「よろしく頼んだ」

いいよ。と承諾する前にすべてが決まっていた。

姉を玄関先まで見送る香介。

「幼稚園寄って買い物してご飯作って来るね」

靴を履き終えた翠、眉間に皺は寄っていないかった。

「私は、母親に戻ります」

「無理し過ぎないようにぼちぼち頑張って」香介は手を振りながら言った。「いってらっしゃい」

翠は目尻に皺を寄せた。「いってきます」

テーブルの上には食べかけのミルクチョコレートと飲みかけのコーヒーカップ、飲み干した後の緑茶のグラスが無造作に置かれている。



おおさきけいこ
大崎景子が言った。「まだまだ居るつもりだよ」

電話越しから南国の香りがした。

「どれくらい居るつもりなの？」と、香介が訊ねた。

「気が済むまで？」

電話越しの景子の声は陽気だ。

「肌に合ってるみたいだね」

「もう半年くらい経つかな」彼女は南国のエネルギーと一体化している。「つぎは西表島、狙ってるよ」

「もっと南へ行くんだ」

香介は頭の中にある地図で場所を確かめた。

「その次は青森かなあ」

姉と妹が自由奔放であることに納得する。

「沖永良部島はどう？」と、香介が訊ねた。

「電照菊とかジャガイモとか手伝ってるよ」

都会の暮らしでは聞き慣れない言葉の数々。

「畑から海が見えるし、十分歩けば海で泳げるし、四方を海に囲まれてるし、この前海にクジラが現れたし」

母親の活力に惚れ惚れする。

「自然は最高、広いし大きいし包み込んでくれる。でもたまに高いビルが恋しくなる瞬間もあるけど」

ないものねだりが人間の真骨頂みたいだ。

「茜と翠は？」と、景子が言った。

「ぼちぼちしてるよ。茜は新しい恋人が出来て、姉ちゃんは相変わらずかな」

「私の娘たちは意気揚々と人生を全うしているわけですね」

喜々に満ちた声が南国から届く。

「それぞれの場所でそれぞれの人生を生き抜いています」

「大崎家は、今が一番旬だね」と、大崎景子が言った。

「ごもつともで」と、大崎香介が返した。

景子の扱う軽快な言葉たちが受話器越しから聞こえてくる。香介は、彼女の聞き慣れた声に含まれる強弱や明暗、間、遅速を味わい無償の安心感を抱いている。

産まれる前から一緒に居るんだ。それくらい味わわせてくれよ。

同時に、遠く離れていても繋がっている事実を捉え、連想した恐れから一粒の不安感も抱いた。声のやり取りだけで知った気になるなよ。とでも言われているみたい。

香介は、抱いた想いを胸に仕舞った。

そういや、島バナナが美味しかった。こっちの人間同士の会話は方言で喋るから何言ってるか分からない。陽射しの威力が凄まじい。電照菊は電気を消してから五十日程で花芽を持つ。今年のジャガイモは単価が良いみたい。初対面なのに心を許してくれた野良猫が居た。定食屋のかつ丼が美味しかった。風の吹く音が凄まじい。電照菊のピークは三月の彼岸の時期だからそれまで手伝おうと思っている。

大崎景子にしか扱えない言葉が聞こえてくる。

「香介、あんた昔鹿児島島の離島行ってなかった？」

「屋久島に居たよ」

「そうだそうだ」

三年前、香介が三十歳の時に父親と母親が同時に実家を出た。母親は見たことのない外界の世界を求めて、父親はより深く自分自身を知るために内側の世界を求めて飛び立った。当時屋久島に滞在していた香介は両親と入れ替わるように実家に舞い戻った。

電話越しの景子は初めて味わう刺激を香介に伝える。その度に懐かしい感覚や目新しい感覚が香介の肉体を襲う。過去に経験した記憶の数々が、比べようとしていたり寄り添おうとしていたり跳ね返そうとしたりする。余白のある今だからこそ冷静に受け止められる事実がある。

なんていう格好つけた思惑が香介の潜在意識から滲みだされた。

「今だからこそ、当時のあんたの気持ちができることもあるよ」と、景子が言った。
「俺もそうだよ」と、香介が返した。

こうして定期的に行う電話のやり取りを通じて香介は過去の記憶を重んじる。そして、見えていないにも関わらず電話越しの母親の目がいつも輝いていることを確信する。

「沖永良部島で何ヶ所目だっけ？」

受話器越しから沈黙の音が流れてくる。

そいつは、景子の指を折る音と呼んでも良いのかもしれない。

「丁度二桁届いたかな？」

「その暮らしも慣れたもんだね」

「もうすぐ三年かな？」すぐさま返答がやってきた。「行動に移す前は怖いと思い込んでたけど、案外何とかなるもんだね」

想像の世界を抜け出し、冒険に出た人間の言葉の根本は似ている。

「くたばるまで続けるつもりだよ」

心の奥底から絞りだした言葉のように聞こえた。

「父さんのところには行くの？」と、香介が言った。

「いずれね！」

*

先日の、母親との電話のやり取りを思い浮かべていた大崎香介。集中力の持続が途切れたのだろうか？ 遡っていた記憶がふつりと姿を消し、現実の世界が彼の視界に入り込んでくる。カーテンによって光が遮断された暗闇の部屋。見慣れた天井。聞き慣れた音。マットレスの感触。眠る前は幾つもの雑念が頭の中を彷徨い、そう簡単には寝かしつけてくれない。どうしてだろう？ と考えてみるが考えたところで気がつけば又雑念らしき思惑が彷徨い、堂々巡りが生みだされる。クタクタに疲れているときはすんなり入眠できるのに……。香介は眠りの中身に関心があるみたいだ。しかしその境目、誰も教えてはくれない。もしこのま

ま目が覚めることがなければ一体、こういった世界が目の前に現れるのだろうか？ 数々の変化に挑み、数々の違いを受け入れ、数々の世界観を染み込ませてきた香介ならではの境地。物理的には同じ景色を見ているにも関わらず、内心はまったく違う景色を見つめている。それが人間社会の本質。くだらない。と思い込むものの香介の頭の中は我関せず、彼が今感じている想いを推し進めるほかなかった。どれだけ意識を継続させようと、咄嗟に現れる無意識には敵わない。翌日目覚めることが叶わなかった自分の行く末を考えながら眠りに入る人間なんてごくわずかだろう。そのごくわずかに食らいつくのも悪くないな……。

いつの間にか眠っていた。

おやすみなさい。



「香介の淹れるコーヒーが一番うまい」と、直晴なおはるが言った。

「俺の親父のコーヒー飲んだことなかったっけ？」と、香介が返した。

「何回もあるよ」先日、葉山翠が腰掛けていた黒色のソファに座っている村島直晴むらしまなおはる。「それでもお前のコーヒーがナンバーワンだよ」

二口目のブラックコーヒーが喉の奥を通っていく。

「ありがとう」向かい側のソファに座る香介が言った。「最近どうよ？」

部屋の片隅で佇む観葉植物が微笑んでいるようにみえた。

「この歳になってようやく世の中が見えてきたかもしれない」

香介と直晴は大学時代に出会った同級生。そこから十年來の親しい友人関係を築いている。香介が大学四年間で得たものは彼との出会いだけと言っても過言ではない。互いを思いやり、丁寧な時間を費やした結果、無条件に信頼し合える間柄に成り代わった。

「自分のこだわりを両手で手離したら世界が横一線に見えてきた」直晴はテーブルに置かれたチョコチップクッキーに手を伸ばした。が、何を想ったのか途中で断念してその手を引っ込めてしまった。「今までの世界は自分本位の世界だったことに気がついてさ、そりゃあ何もうまく回らないわけだと思えた瞬間があったんだよ」

「大切なものほど一度両手で捨ててみろって言うよね。失って初めて真の価値を知るみたいなところなんだろうね」

少し前、直晴がこの部屋に訪れた時から香介は一種の違和感を抱きつづけている。彼は直晴を一目見た瞬間思わず、人目も気にせず玄関先に駆け込みたい衝動に襲われていた。親しい友人との会話を積み重ねながらも頭の抛り所はどこか別の場所に置かれている。焦点を合わせる。純白のシャツにベージュ色のチノパン、靴下は白のロングタイプ。いつもはラフなスタイルを好む彼が今日は誰がどう見てもあからさまなフォーマルスタイル……なぜだ？

ブラックコーヒーを味わう直晴が言った。「自分の中の違いを受け入れ始めると、他人と

の違いも受け入れやすくなるのかな？」

「まさに直晴の言う通りだと思うよ」香介は純白のシャツに視線を送っている。「自分の肉体から生みだされる感情の種類を知れば知るほど、その感情を投影して他人に寄り添えるはず」

チョコチップクッキーを見つめる直晴が言った。「それどうやって知ったの？」

「スターウォーズ」

直晴は何も答えなかった。

「フォースと共にあらんことを」

大崎香介は昨晚鑑賞した映画の印象的なシーンをそのまま口にした。

村島直晴の表情が小さな寂しさに包まれた。「その感性何かに使えよ、もったいない」

「十二分に扱ってるよ」と、香介が返した。

「ずっと実家でのんびりしてないでさ」直晴はひとつ、丁寧に間を空けてから言葉を放った。「何かやりたいことないの？」

「もうすでに満たされてる」

香介は、ブラックコーヒーをゆっくりと味わった。

「ウズウズしないの？」と、直晴が訊ねた。

なんでフォーマルスタイルなの？ と問い返してやりたい。

「又、全国各地を飛び回りたいとは思わないの？」

デートか？ それとも何だ？ と突き詰めてやりたい。

「あの頃の香介が一番、活き活きしてたよ？」

この服装にどんな靴を合わせてきたんだ？ と玄関先に駆け込んでやりたい。

「不思議だよな」直晴はどうしても納得できないみたいだ。「正反対の暮らしたぞ？」

「ある日突然、器が出来上がる音がしたんだよ」

「そんな音あんの？」

「それがあるんだよ」 シンプルに黒色の革靴を想像した香介。「これは感覚的なもので誰にも伝わらないと思う」

「プチって音がすんの？」

「音だけど、音じゃないんだよ」

「しいて言うならどんな感じ？」

香介は、真剣な表情で言った。「ヨーダに聞けば分かるかもしれない」

「又、飛び回ればいいじゃん」直晴は構わない。「今度は海外行ってみれば？」

十秒くらい、香介は考え込む素振りを見せた。

その間、直晴は平然としていた。

「もちろんいずれ世界を飛び回る機会が目の前にやってくるかもしれない」香介は、そこで一つ観葉植物に目をやった。「もしかしたら世界を飛び越えて宇宙を飛び回っているかもしれないけどね」

「ミレニウム・ファルコンで？」

瞬間、ふたりの目と目が合わさった。

「ミレニウム・ファルコンで」

ベージュ色のチノパンを穿いた直晴が身を乗り出す。「それなら俺も将来宇宙戦争に参加させて貰うよ」

直晴の目を見ながら発する香介の瞳がやさしさと埋め尽くされている。「直晴が行くならやめとこうかな」

言葉を受けた直晴の目尻に細やかな皺が寄せられた。「絶対一緒に連れてく」

純白のシャツを見つめる香介は固く決めた。彼の口からフォーマルスタイルの真相が飛び出すまでこちらからは聞かないでおこうと。

部屋の片隅で佇む観葉植物が肯いているようにみえた。

「どちらにしても今はこの暮らしを堪能している」

彼らは会話を積み重ねていった。学生時代のくだらない話から世の中の仕組みに対する想いまで幅広く言葉を交わしていく。好き勝手な言葉を吐いて好き勝手な質問をする。無知であることを知らずに幼い人格を纏っていた頃からの付き合いだからこそ恥ずかしい体験まで共有できるのだろうか？ 何度も会話した内容なのに初めて話した時よりも腹を抱え

て笑ってしまうこともある。傍が聞き耳を立てていたのなら、『何がそんなに面白いの?』と怪訝な表情で伝えられている絵がありありと想像できるがそんなの説明なんてできっこない。『面白いのに理由なんてない』と言って又腹を抱えて笑い合うのがオチだろう。

ふたりは、テーブルに置かれたチョコチップクッキーに一度も手を付けていない。

「梅沢、もう子供三人だって」と、直晴が言った。

「そうなの?」と、香介が返した。

「二人で終わる予定だったのに双子授かって今三人。双子を身ごもる前に家族四人用の家を買っちゃったらしいよ」

「それは災難だな」

「結婚もせずに授かる機会もない俺たちの方が有意義災難かもしれないけどな」

香介の脳裏に特定の女性の姿が映し出された。

「まあ俺はまだまだ自分のやりたい事で精一杯だけど」

複雑な感情が散り散りにやってきて胸を締め付けられている香介。しかし、その想いはすぐに消え去り、ある疑問が浮上してきた。フォーマルスタイル……デートじゃないのか?

香介は座り慣れたソファから立ち上がり、直晴のコーヒーカップに目をやった。「おかわりいる?」

ちらりと時計を確かめた直晴が首を振った。「そろそろ行くよ」

*

買い物へ出掛けるついでだと伝えた香介は、直晴を最寄りの駅まで見送ることに成功した。駅へ向かうまでの間にフォーマルスタイルの真相が導きだされることを期待した香介だったが、最後の最後まで直晴の口から放たれることはなかった。いつも通りの音程で、それじゃあ。と言って改札を通り、右手をあげて、階段を上っていった。香介は遠ざかる直晴の足元をしばらく見つめたまま少しだけ頬を緩ませた。

「フォースと共にあらんことを」



通い慣れたスーパーマーケットへ向かう大崎香介の頭の中には大崎英明との記憶が映し出されていた。半ば父親が導いてくれたこの人生。どこかの大学に進学して、どこかの企業に就職して、どこかの誰かと交際して結婚。機会に恵まれば子供を授かって孫を見届けて安らぎを味わいながらあの世へ逝く。誰しもが通るであろう人生の道すじをなんとなく思い描いていた当時高校三年生の香介に対してある日、寡黙な父親が言い放った。

「勉強なんてしなくてもいいから大学へ行ってみろ」

そして、続けた。

「その四年間でやりたいことを見つけなさい」

見つかったのは、村島直晴という親友だけだった。

スーパーマーケットの入り口を跨いだ香介は、現実世界に焦点を合わせていた。

色とりどりの食材がお行儀よく並んでいる。野菜、果物、肉、魚、調味料、インスタント食品。その他にもありとあらゆる品物が陳列している。そして、静止する彼らを求める色とりどりの人間たちが右往左往している。男性、女性、老人、若者、子連れ、カップル、独り身、大家族。性別も年齢もさまざま。スーパーマーケットを歩き回りながら本日の献立を決める者もあれば、事前に献立を決めて必要な品物だけを買う物かごに入れる者もある。割引のシールが貼ってあるとそれだけで特別な気分になり、潔く献立を変更する者だってあるだろう。煮物、揚げ物、炒め物。日々の献立を考えるだけでも一苦労。美味しそうに並ぶお惣菜コーナーを見て、たまには出来合いの物で……と手を伸ばすのは当然の習わしである。

大崎香介は店内を歩き回り頭の中で今晚の献立を組み立てていた。静止し続ける品物たちに焦点を合わせ、頭の中に取り込み、出来上がりを想定する。ある程度まとまり、目星を付け、買い物かごにすべての食材を入れたところで、果たして茜は夕食までに帰って来るのだろうか？ という疑問の壁に衝突した。彼女は好き嫌いが激しい。そのうえ、正直な気持ちを言動に移す。

一度、自画自賛するほど美味しいと思えたナポリタンを作りあげた香介。食卓で待つ茜に差し出し、彼女の表情を見届ける。一口食べた後、『今日はご飯が食べたかった』と言って近くの弁当屋まで足を運びテイクアウトしてきたチキン南蛮弁当を『やっぱり美味しい』と目の前で連呼する彼女の姿を見て、これは自惚れだったのだろうか？ と思いながら一人

ナポリタンを食べる記憶が香介の頭の中に現れた。彼は買い物かごに入っていたパスタを掴み、棚に戻した。今まで積み重ねた献立を崩し、茜が帰ってきたとき用の献立を新たに積み重ねようと又店内を一周する。一瞬、逃げ腰になってお惣菜コーナーへ足を向けた香介だったが、思い直して食材を買い物かごに入れ始める。心の中で、過去の記憶に負けてたまるか。と三度唱えた香介の表情を見た者は誰も居なかった。



大崎香介よりも六十センチ身長の低い葉山洋はやまようが言った。「ボールで遊ぼう」

「嫌だ」と返す香介。「俺、レゴで遊びたいんだけど」

洋は駄々をこねることなくあっさり承諾した。「いいよ」

「じゃあちょっと待ってて」

土曜日の昼下がり、自宅には大崎香介と葉山洋の二人だけが存在していた。

十五分ほど前、葉山翠が息子を預けにやってきた。お昼ご飯のお弁当、三時のおやつに食べるお菓子、そして、よろしく頼んだという言葉を残して彼女は友人たちとの集いへ向かった。玄関先で見送った後、香介は思った。三時までは戻らないということなんだね。

隣に視線を送ると同じ表情をした洋と目が合った。そして互いに何かを察したのか、無言で肯き合って友情を確かめた。

スターウォーズのレゴブロックで遊んでいる香介と洋。

「こいつは誰？」

「そいつはヨーダ」

「香介が持ってるのは？」

「ダースベイダー」

ふたりの会話はこれだけで十分だった。

遊び方なんて誰からも教わっていないのに独自の感性で物語を紡いでいく小学一年生。ヨーダの気持ちになったり、ダースベイダーの気持ちになったり、葉山洋は見たことのない映画のキャラクターになりきっている。香介は彼の世界観を受け入れるように手に持つダースベイダーの気持ちを感じながら言葉を紡いでいく。

「ヨーダさん、こんにちは」

「君と俺は顔が似ています」と、洋が言った。

「中身は違いすぎるくらい違うかもしれないね？」と、香介が返した。

「ダースベイダーくんばんは」

「楽しい時間はあっという間に過ぎていきますね」

どうやら、ヨーダとダースベイダーは双子の兄弟みたいだ。C3POが母親でR2D2が父親。ペットはチューバッカでオビワンケノービは近所のおじさん。ルークスカイウォーカーは八百屋さん。アナキンスカイウォーカーは魚屋さん。ハンソロは、おならだった。

ハンソロに役割を与えた辺りから世界が破滅し始めた。この年代の男の子は、うんちおしっこおならの三銃士がいればどんな遊びでも成り立つように出来ているみたいだ。香介は、破滅した世界を一时间ほど堪能した。飽きることなく受け流すことなく洋と共にこの世界観の地に足を付け、心の安らぎを深めていく。

「香介、レゴって何？」と、洋が訊ねた。
「おならくん」

洋は腹を抱えて笑った。

「じゃあうんちちゃんは？」
「おしっこちゃんのおならくん」

洋は両手を叩いて笑った。

「香介、おじいちゃんは今どこにいるの？」

落差のある展開を受けた香介は反射的に、おなら博士に連れ去られた。と言おうとした。けれども思い直して本音を洩らした。

「電気もガスも通ってないところに居るよ」
「それは、天国？」

三年間で一度だけ父親に会いに出掛けた過去の記憶を元に言葉を扱う香介。

「場合によればその捉え方が最適かもしれない」
「おならちゃん、いるかな？」
「八百屋さんに聞いてみれば？」
「ボールで遊ぼ！」

洋の興味対象が瞬発的に移り変わった。彼は破滅した世界から脱し、移ろう世界観に身を委ね玄関先へ駆け込む。しかしすぐさま方向転換。香介の視界に現れ、大きな声で言い放つ

た。

「やっぱりお腹空いた！」

香介は破滅した世界観が終わりを迎えたことにやんわり寂しさを抱いた。二人とも空間に没頭していた過去に別れを告げ、顔を見合わせる。又、心がつながったみたいだ。香介は時刻を確かめる。時刻は午前を通り過ぎ、午後を迎えていた。



香介が注文したベーコンレタスバーガーに視線を送る大崎茜が言った。

「それ美味しい？」

この前、頼んでたよね？　と伝えたいところではあるがそんな野暮な言葉は扱わないと決めている。

「食べる？」

いいの？　と言った彼女にベーコンレタスバーガーを差し出す大崎香介。

店内のBGMは相変わらずハンバーガーに寄り添っている。香介は相変わらず通路側の椅子に腰掛けている。業務用の活気に満ちた女性は相変わらず清々しい佇まいを見せてくれている。

「全部食べちゃってもいい？」

香介は何も発することなく受け入れた。彼の頭の中の茜は、ありがとう！　さすが自慢のお兄ちゃん！　と満面の笑みを零している。しかし目の前の彼女はベーコンレタスバーガーを手元に黙々と時間を刻んでいた。

「オレンジジュース美味しい？」

香介の喉に一口分のオレンジジュースが流れ込んだ時、茜が訊ねてきた。反射的に、飲む？　という言葉を送った。が、その前に茜の右手が香介のオレンジジュースを掴み取り、そのまま彼女の口元へ向かった。

「想定内の味だね」

望んでいるうちは永遠に満たされないことに気がついていいる香介は、フライドポテトを一本手に取りそのまま口の中へ放り込む。備え付けのケチャップには一切目もくれず、妹の表情をこまめに窺う。目の前に訪れる現実に一生懸命一喜一憂する彼女を見ていると、羨ましさや愛おしさが香介を包み込んでくれる。

今朝、まだ眠りの中に居た香介は玄関の扉が乱雑に開閉される音で目を覚ました。茜か。

と無意識的に感じ、二階へ上っていく彼女の足音を連想する。しかし、現実はその甘くなかった。玄関の扉が閉まった後、彼女の足音は階段を上ることなく香介の耳の中へ大きく迫ってくる。扉の閉め方同様、足音も乱雑だった。ベッドに横たわる香介は時刻を確かめようと時計の位置に視線を向ける。見えない。暗闇が許してくれなかった。ただ、真夜中ではないということだけは感覚的に掴んでいた。そこで二三秒の記憶が異次元に浮遊する。寝ぼけ眼の香介はまだ意識を上手く扱えていない。部屋の扉が開くよりも前に、茜の声が耳に届いた気がした。

「お兄ちゃん、聞いてよ！」

聞きたい気持ちは山々だけど、今何時だと思ってるの？　と大崎香介の声なき声が妹に伝えようとしている。まあ俺も知らないんだけどね。という遊び心が邪魔をしてきたからちよつと横に置いておく。その隙間をかくぐつて放たれた彼の第一声は、おはよう。だった。香介の掠れた声が聞こえたのか聞こえていないのか、茜はお伺いを立てる間もなく電気スイッチを押した。そして香介のベッドに歩み寄る。暗闇に寄り添っていた瞳に光が入り込み、眩しさを感じさせた。夢半ばの香介は茜の表情を確認する。溢れんばかりの感情が乗り移っているね。と誰かが囁いてきた。ごもつともだね。と返そうとした香介だったが、興奮状態の茜に目を向けると自然と身体が起き上がっていた。そして、何かを喋りつづける茜の音だけを感じ時計に目をやった。午前六時三十二分。短い針より長い針が少しだけ進んでいる。

香介はゆつくりと立ち上がり、『温かいものでも飲もう』と彼女の肩に手を乗せた後、居間へ向かった。

茜は、つけた電気を消すことなく香介の背中を見るように居間へつづいた。

*

「あり得くない？」

茜の口元から零れる憎らしい想いが野に放たれる。香介は彼女の怒号に満ちた声を耳で感じ取る。嫌いな仕草や態度、こんな言葉を言われて、こんな思いやりしかくれなかった。自分のことを、あーちゃん。と呼んでくるし、喧嘩した後の言動にも呆れてしまった。

よく、付き合う理由と別れる理由は捉え方が違うだけで同じである。と言われるが香介は妹の話を聞いて素直に納得した。

「もう恋愛なんて一生しない」

元恋人の話をする彼女の目は眩しくなかった。瞳の奥の隙間からこっそりこちらを見つめている危うさが、ほれ見たことか。と得意げに微笑んでいるようにみえる。しかし、チャンスは星の数ほどあるから心配するな。とすぐさまフォローを入れてくれた危うさの優しさを感じた香介の価値観が少しだけ戸惑いを見せた。

「私、悪くないよね？」

もちろん、誰も悪くない。それよりも、そのソファアードんな感触？　と伝えてみたい衝動に駆られる大崎香介。今朝、居間でホットミルクを飲みながら二人で話していた内容と全く同じ類のものをハンバーガーシヨップでも聞いている。その分、耳が慣れてしまい先の展開が読めてしまう。そうすると、考えなくてもいいことがどんどん浮かび上がってくる。そのソファアードんな感触？

そもそも香介にとってソファアの感触を確かめる機会はいくらでもある。後日ひとりでハンバーガーシヨップに足を運ぶことだってできるし、茜がお手洗いへ出向いている間にさらに確かめるのも容易いだろう。だが、大崎香介は答え合わせをする気がない。彼は、中途半端最高。という美学を掲げて生きているのかもしれないし、答え合わせをした後のあつけなさに気がついているのかもしれない。答えを求めている間が頂点であることを知らず知らずのうちに身体に染み込ませてきたのだろう。

「なんで私ばかり嫌な思いをしないといけないわけ？」

ベーコンレタスバーガーとオレンジジュースを両手に持つ茜の仕草が妙に美しかった。

「嫌な思いが出来るだけでもいいんじゃない？」

「意味わかんないんだけど」

いつの間にか嫌な思いもなくなってしまった。

「茜は可愛いから大丈夫だよ」と、香介が伝えた。

「今日の夜は家で慰め会してよ」と、茜が返した。

今のこの時間はなんですか？

「今日だけは優しくしてよね」

いつもはどう思っているんですか？

「お兄ちゃんの手料理が食べたい」

え？ 意表を突かれた香介、三度瞬きをした。

「あれ、めちゃくちゃ美味しかったから」

あれ、自惚れじゃなかったのか？

「だから今日は手料理で慰め会ね」

急にチキン南蛮弁当が食べたくなってきた。

「いいでしょ？ 手料理」

「じゃあ食べ終わったら買い物して帰ろうか」

「仕方ないから一緒に行ってあげる」

大崎茜が大学生になった時、両親が実家を後にした。事前に母親から相談を受けていた香介は自分の意思で実家へ舞い戻った。その際、茜を頼んだよ。と母親から伝えられていた。一昔前の彼なら自分を満たすための欲望を最優先させていただろう。当時の彼に同じ相談を持ち掛けたのなら、まだ無理。と答えていたかもしれない。しかし、タイミングというのも成り行きだ。過去の思惑から百八十度変わってしまう景色にたどり着くことだってある。母親から相談を受けた香介は心の奥底から戻ってもいいと思えた。同時に、母親との約束を守り抜こうと決意した香介は、自分よりも茜を優先すると心に誓った。思っても見なかった未来が訪れる。不思議な体験だった。

ひと回り年下の妹と暮らすようになってから香介は、父親の心持ちを感じる機会が増えていった。父さんはこんな気持ちで俺に言葉を伝えてくれたのだろうか？ 行動に移しやすいように伝えてくれたのだろうか？

未熟であるが故の美しさを受け入れる側に立って初めて重なる過去のひととき。香介は茜と暮らすようになってからよく振り返る過去の記憶がある。

「大学四年間でやりたいことが見つからなかった」

想いを父親に伝えたあの日、『それなら就職しないで母国を感じてこい』と伝えられた一か月後には勝手に行き先が決められていた。

「卒業したらここへ行つてこい。その次からは自分で自分の居場所を探してみろ」

そこから約八年間、香介は全国各地を飛び回った。農作業、山小屋、リゾートホテル、新聞配達、ゲストハウス、旅館、喫茶店、その他もろもろ……。滞在期間や職種、自らの立ち位置、環境やその土地の人間との関係性などすべてを自分で決断していかなければならなかった。初めのうちはやらされている感が強かったが二年が経過したある時、一線を越えた。器に溜まった水滴が溢れ出るように、地道な積み重ねが変化をもたらした。その真実は幸か不幸か香介に自己の確立を与えた。意思が芽生え、課題が見つかり、彼の頭の中から、なんとなく。という文字が消えた。

世界が活発に見えた。一心不乱に目の前の課題と向き合った。時には、自分勝手な振舞いで誰かを傷つけたこともあるだろう。時には、自分勝手な振舞いで誰かを勇気づけたこともあるだろう。その自己中心的な言動がそのまま自分に跳ね返って、傷ついて、勇気づけられたこともあっただろう。当時の香介は活き活きしていた。自分のために生きていた。世界のために生きていた。そして意識して時間を費やした分だけ、知らないことが減っていった。と同時に、無知であることの華やかさを思い知り、肩の力が抜ける音を味わった。

**

眠りから目覚めた香介のパジャマには汗がべっとり纏っていた。

数秒間、見慣れた天井を見つめたまま落ち着きがやってくるのをひたすら待った大崎香介。薄れていく感覚と入れ替わるように冷静な思考が舞い降りる。ベッドの脇に置いてあるペットボトルを手に取り、ごく、ごくと喉に水分を通わせながら夢の記憶を振り返る。

*

夢の季節は秋だった。香介は、よく夢に出てくる街に居た。改札を抜けるところから始まり、並木道を歩き、気がついたときには螺旋階段を上っていた。足音もいつも通り、眺める景色もいつも通り、夢の中の世界に安心感を抱きながらぐるぐると螺旋階段を上っていく。ふと、金木犀の匂いが鼻先を掠め、小学三年生の運動会を連想する。かけっこ、よいいどん。必死で腕を振る香介の隣には直晴の姿があった。彼と出会ったのは大学生のはず。なのに、視線の先には小学三年生の村島直晴、体操服を身に着けている。並走する香介は想像する。果たして体操服はフォーマルスタイルなのだろうか？ それともカジュアルスタイルなのだろうか？ 金木犀の香りが、ケタケタと笑っていた。そもそも大学生になるまで直晴の顔、見たことがないぞ？ こいつは誰なんだ？ 冷静な思考なんて夢の中じゃ不毛同然ですよ。と腕を振る直晴が言った。香介は直感で悟った。こいつは正真正銘、村島直晴である。頭で考えているうちは頭で考えているだけだ。と耳元で誰かが囁いた。村島直晴が、ケタケタ笑っている。彼はそのまま腕を強く振り、膝を高く上げ、宙を駆けるように浮かんでいた。立ち止まり見上げる小学三年生の香介は直晴の足元に視線を向ける。彼は、何も履いていなかった。直晴の足の裏、初めて見たかもしれない。

場面が移ろう。大崎香介がゴールテープを切ったところへ移ろう。

「やっぱり直晴は速いな！」

「やっぱり直晴はフォーマルだよな！」

「やっぱり直晴はカジュアルだよな！」

見たことも聞いたこともない知らない同級生たちが直晴を囲み、祝福していた。金木犀が又、ケタケタ笑っている。その金木犀の想いを代弁するかのように祝福されている直晴がこちらに視線を向けながら言い放つ。

「連想してしまうのも一苦労だよな」

彼は素足だった。又、何も履いていなかった。香介は自身の足元に視線を移す。見たことも履いたこともないスニーカーを身に着けている。

首を傾げる香介に直晴が言った。

「いい靴だな」

彼はもう体操服を着ていなかった。

唐突に、世界に一人だけみたいだ。と感じてしまった香介に、金木犀の香りが口を開いた。

「夢と現実が繋がっている。そいつを確かめに行ってくる。それには孤独が必要だ」

金木犀の声はあの日、玄関先で実家を出るときの父親の声そのものだった。



公園のベンチに腰掛ける二人の姿があった。

自動販売機で買った缶コーヒーを片手に直晴が言う。「梅沢の奴、血迷ってるみたいだぞ」
「何が？」家から持ってきた水筒を片手に持つ香介が返した。

「四人目」

「四人目？」

「この前話してたらさ、三人も四人も同じだって張り切ってたぞ」

香介は公園で遊ぶ子供たちに目を向ける。「ここに居る人数よりも多いな」

「お前も梅沢を見習ってそろそろ張り切れよ」

公園のベンチに男がふたり、どうやって張り切れと言うんだよ。

「俺はさ、活き活きしているお前の姿が見たいんだよ」

直晴は、香介に会うたびにこの言葉を伝える。

「俺、そんなに活き活きしてないかな？」

北風の寒さが素直にさせてくれる。

「梅沢の八人目くらいじゃない？」

見当違いも甚だしい言葉のおかげで身を引くことができた。

「一つ質問するけど」ブランコに揺られる幼児の姿を見つめる香介が言った。「活き活きは、人生に必要なのか？」

直晴のお尻からおならの音が聞こえてきた。

瞬間、香介の頭の中にはハンソロの姿が映し出され、すべてがどうでも良くなった。

「ほら！」直晴が語気を強めた。「おならさんが、そうだ！とおっしゃっている」

「じゃあ直晴は何に活き活きしてるの？」

「お前の冷静さがこの寒さを作り出しているんじゃないの？」

香介は、わざとらしく親友に伝えた。「自発的に活き活き出来ない身体になっちゃった」

「なんか分かる気がする」直晴の真剣な眼差しを久しぶりに見た気がした。「これが老いか？」

ブランコに揺られていた幼児たちがいつの間にか滑り台に移動していた。

香介の口から本音が洩れる。「理由なんてすべて後付けだろ」

見守る母親たちに視線を向けた直晴が言う。「俺たちより年下かな？」

「もしかしたら」

「もし俺たちが二十歳で子供授かってたらさ、今頃中学生とかだろ？」

直晴のお尻から又、おならの音が聞こえてきた。

瞬間又、香介の頭の中にはハンソロの姿が映し出された。

「何食べたたらそんなに出るんだよ」

「焼き芋」

香介は、鼻で笑うしかできなかった。呆れよりも先に尊敬がやってきた。

「俺自身がまだ中学生だから中学生は育てられないな」と、直晴が言った。

「親友にはなれるかもな」

「それもありだな」

シソーミみたいな親友との会話も悪くないなと思った香介は、直晴の足元に目をやった。そして、わずかに頬を緩ませた。



「洋、あんた少しでも静かに出来ないの？」と、葉山翠が言った。
「だってボールで遊びたいもん」と、葉山洋が返した。

レゴブロックで遊びたいとは一言も言わなかった。

「さっき遊んだじゃん！」

俺がね。とソファに座る香介が心の中で叫んだ。

「もっと遊びたい」

「もう少しゆっくりしなよ」

「香介、遊ぼうよ」と、洋が言った。

「レゴならいいけど」

洋の表情が少しだけ歪んだ気がした。

洋は何も言わずに天井を見あげた。それから何も言わずにソファに座った。

「洋、カルピス飲む？」と、翠が訊ねる。

「飲む」

黒色のソファに腰掛けていた翠が立ち上がり、洋の要望に応えるために冷蔵庫へ向かった。翠の母親としての姿を見つめる香介は、母親という職業の偉大さを実感する。洋がこの世に生まれ落ちてから姉の姿を見届けてきた。実家に戻って来てからはより定期的にその姿を目の当たりにしている。子育ては、世界で一番取り乱されるのではないかと間接的に思う機会が増えた。世の母親が強い根拠も頭で理解した。

洋と居る時の翠は、香介にワガママを言う回数が圧倒的に減る。コーヒーも自分で淹れるし、ミルクチョコレートも半分に折って洋に渡している。洋がもっと食べたいというものなら自分の分を何の邪念もなく差し出している。洋と共にしている時は、母親のスイッチが入っているのだろうか？ 愚痴も言わなければ、文句も言わない。彼女も彼女なりに自分を扱っているのだろう。不思議な関係性だな。と改めて二人を見つめる大崎香介。

「母さんいつ帰って来るとか言ってた？」と、翠が言った。

「そろそろ帰ってくるって言ってたよ」と、香介が返した。

「おばあちゃん帰って来るの？」と、洋が言った。

「そろそろ帰って来るよ」と、香介が返した。

「どうせ又すぐどこかへ飛んでいくんでしょ？」と、翠が言った。

「おばあちゃん、翼生えてるの？」と、洋が返した。

「翼なんて生える訳ないでしょ、人間なんだから」翠がつづけた。「いや案外、うちの両親は人間じゃないかもしれない」

その子供の俺たちは一体、何者なんだよ。

「おばあちゃんもおじいちゃんも怪物なの？」

ソファーに座る香介が言う。「ある意味、超下級の怪物だよ」

洋の瞳が輝いた。

「茜は？」と、翠が訊ねた。

「朝から学校行ったよ」

「あいつ早起き出来るの？」

「カッコいい人と講義が同じなんだって」土曜日の朝一番から活力を身に纏った茜を玄関先まで見送った香介。彼女の身なりを見て、一体何をしに行くんだ。と冷静に感じた記憶を思い浮かべた。「理由があれば何でもできる」

「また馬鹿なことして」

「茜って馬鹿なの？」と、洋が言った。

「超下級の大馬鹿者」と、翠が返した。

瞬間又、洋の瞳が輝くのが分かった。

「私も大学生に戻りたいなあ」と呟く翠。「ミニスカート、穿きたい」
香介の頭の中で、『吐きたい』という文字が浮かび上がった。「それ、今度母さんに言ってみれば？」

「あの人は、何も穿かないよ」と、翠が言う。

「おばあちゃん、何も穿いてないの？」洋は両手でズボンとパンツを同時に下ろした。「こんな感じ？」

あんなに潔く下半身をさらけ出せるのはどうしてだろう？

母親が息子を諭す。「やめなさい」

「どう？」洋は夢中になっている。「香介、見て！」

どうして見て欲しいんだろう？

「見て見て！」

考え事をしながら冷静に洋のお尻を見つめる香介。

「香介、見すぎ！」

見てと見すぎの境目が全く分らなかった。「ごめんね」
その境目は、これから先も分からないのだろう。

**

眩しい瞳の輝きを放つ茜が言う。

「私、好きな人が出来そう」

このペースで行けばこのハンバーガーショップのバーガーの種類よりも彼女の歴代の恋人の数の方が上回るのではないかという疑念が浮かんでくる。

香介は用意された言葉を茜に伝える。「朝の講義が同じ人？」

「あの人は駄目」茜の表情が変わり、溜息が生まれた。「服装の感性が合わない」女心と秋の空。

「じゃあどんな人なの？」と、香介が訊ねた。

「言葉に出来ないから好きになるんでしょ」

ハンバーガーショップの空間が一瞬、静寂に包まれた気がした。

「好きに理由なんて必要ない」茜の表情には鋭さが見えた。「お兄ちゃんは好きな人居ないの？」

特定の女性の姿が映し出される。

「会いたいと思わないの？」

彼女の感触がふわりと肉体を巡り、音もなく消えた。

*

「来週の火曜日に帰るよー」と、景子が言った。

電話越しからは相変わらず南国の香りがする。

「次はもう決まってるの？」と、香介が返した。

「どこかを經由して静岡に行くことだけは決めてる」

「静岡？」

西表島と青森はどこかへ飛び去ったようだ。

「シャインマスカット」

果汁の甘味が口の中全体に広がった。

「そのまま社員になっちゃうかもだけど」

香介はあえて無言を貫いた。

「これが言いたいから行きたいんだ」

香介はあえて何も訊ねなかった。「じゃあ来週火曜日、楽しみに待ってるよ」

*

「ねえ聞いてよ……」

それから数十分、ソファ―に腰掛ける葉山翠は香介の淹れたコーヒーを飲みながら心を軽くしていく。

*

「梅沢、また双子かもしれないって」と、村島直晴が言った。「一番上はどんな気分なんだろうな？」

「俺たちじゃ想像できない世界なんだろうな」

香介は想像した。双子が二組、家の中で駆けまわる世界。

「他人の心配してる場合じゃねえか」直晴は缶コーヒーを一口飲んだ。「でも、他人の心配している時が一番落ち着くよな」

*

「ダースベイダーくんばんは」

「C3POくんには」

「ルークスカイウォーカーおはよう」

「ハンソロ、大好き！」

*

「早く好きな人欲しいな」と、大崎茜が言った。

「作ればいいじゃん」と、大崎香介が返した。

「理由がないと好きになんかなれないでしょう？」

香介の目が点になった。

「好きな人、どこかに居ないかな」

*

好きな人、どこかに居ないかな。香介の脳裏に特定の女性の姿が映し出された。



大崎香介には好きな人が居る。

彼は一目で彼女に惚れた。

しかし、彼は彼女の素性を知らない。

彼女はパンダの仮面を被っている。

現実世界で対面したこともなければ、名前も知らない。

なぜなら、彼女は夢の中にしか存在しないからだ。

全国各地を飛び回っていた当時二十五歳を迎えた香介の夢の中にある日、パンダの仮面を被った女性の存在が現れた。「初めましてこんばんは……」

電撃が走った。

いつまでも続くであろうと信じていた彼女との夢物語が突如遮られ、目を覚ました香介に待ち受けていたのは今まで味わったことのない快楽だった。頭の中だけではなく身体全体に馴染んでいくこの感覚……まさに一線を越えた瞬間、感情が遙か遠くに連れ去れてしまったようだった。現実世界のどの快楽にも真似できない濃厚さ、海底に沈んでいく。

「なんだこれ」

その日以来、香介は定期的にパンダの仮面のお姉さんの夢を見た。新しい環境に移り、季節をひとつ跨いだ頃、彼女は現れる。まるで次の目的地への変化を促すように現れる。

「なんだこれ」

次第に、彼女との夢のひとときが一つの判断基準になっていった。一方で現実世界での振舞いに感情が移入しなくなっていく。肉体から生み出される感情は敏感に湧き出し起伏しているのだが、言動に移す程でもない熱が冷えていく。無難な言葉を選び、無難な対応を取り、無難な距離感で空間の調和を推し量る。

夢の世界に感情を奪われてしまったみたいだ。

そのうち、環境に馴染んでいく過程を身体が覚え始める。そろそろ彼女が夢に現れる頃合いだ。なんていう感性が香介の身体に染み込んでいく。夢の世界だけに存在するパンダの仮面のお姉さんに会いたい一心で現実世界の肉体を扱っていく。

大崎香介は、夢と現実の繋がりに関心を抱かざるを得なかった。それまで、現実世界から反映されるのが夢だと思い込んでいた。なんとなく夢を見て、なんとなく夢を記憶し、なんとなく夢を味わっていた。しかし、パンダの仮面のお姉さんが現れてからというもの、特定の夢を味わうために現実世界を整えた。まるで、天と地が逆さになったようだった。

「なんだこれ」

新たな環境へ移ろい、ひとつ季節を跨いだ頃、やはり彼女は現れた。

いつもと同じようにパンダの仮面を被り、素顔は見せてくれなかった。夢に出てくるいつもの街で肩を寄せ合い、並木道を歩き、螺旋階段を上る。夢の世界のハンバーガーショップを歩き、ソファアの感触を確かめる。夢の世界のスーパーマーケットへ向かい、お惣菜に手を伸ばす。夢の世界の動物園に入り、二人そろってパンダの親子を観察する。彼女の隣で歩く限定的な幸せに肩までどっぷり浸り込む。夢の世界の香介は、目の前の一秒に一生懸命一喜一憂していた。会いたいからと言っていつでも会える訳ではない。抽象的な世界に想いを寄せる儚さ。目が覚めたときにやってくる絶望感たるや。どれだけ頭で考え抜いたとしても実らないと分かっているのに、現実世界で頭を回転させる自分の存在を認める度、虚しさが鋭く胸に突き刺さる。稀に、この話を誰かと共有して楽になりたい。と思い込む時期があるが、話したところで夢の中の物語を共有なんてできやしない。

実は俺、夢の中だけに現れるパンダの仮面を被ったお姉さんが好きなんだ！

真実を伝えたところで何になるというのだろうか？ 彼は悶々とする心持ちを独りで抱え込みながら、ひたすら彼女を追い求めた。

香介が全国各地を飛び回って八年、パンダの仮面のお姉さんが現れてから六年が経ったある日、当時屋久島に滞在していた香介の内側で器が出来上がる音が鳴った。彼は何の変哲もない瞬間を生き抜いている最中だった。耳の内側からこめかみの辺りに音のない音が響き渡り、じわりと身体に熱が帯びるのを感じ取る。到底、言葉では説明できない。

「なんだこれ」

その日の夜、夢の中に彼女が現れた。そして彼女は唐突に言った。

「お役目ご苦労、さようなら」

夢から醒めた香介はすぐに、もう彼女には会えないと悟った。ほんの一瞬で、見える世界が百八十度変わってしまった。今までの価値観が一斉に崩れ落ち、これは誰の肉体だ？ と

自分に疑いをかける程だった。すべての感情が統一され、善し悪しの基準が薄れていく。なにを見てもなにを聞いても湧いてくる感情を掴めずに無機質なまま受け止める。まるで、世界から色が消えたみたいだった。

一週間後、母親から相談を受けることになる。

「実家に帰って来るつもりないかな？」

**

夢の感覚が肉体に染みついている。なににも例えられない思いが快楽として包み込んでくれている。カーテンによって光が遮断された暗闇の部屋。見慣れた天井。聞き慣れた音。マットレスの感触。時刻は？

香介は、『パンダの仮面のお姉さん』と呟いた。

三年ぶりに現れた彼女は『お久しぶり』と言った。

彼女との記憶を細かく振り返ろうとする。寝起きのまだ覚醒していない頭を回転させ、散り散りになったピースを集めようとする。

*

そこは、いつもの夢の街ではなかった。改札も違えば、並木道もない。蒸気機関車がどつしりと構えていた気がする。駅前には大きな木が一本佇み、空が広がった。小道が何本にも分かれ、どの道歩いても待ち受けている境遇は華やかだと確信した。商店街？ 賑わっていた？ 八百屋、魚屋、肉屋、文房具屋、駄菓子屋、居酒屋、ケーキ屋、スーパーマーケット、コンビニエンスストア、コインランドリー、ゲームセンター、レンタルビデオショップ、ライブハウス、スポーツバー、歯科医院、整骨院、美容院、病院、銭湯、学校、英会話教室、ペットショップ、トレーニングジム、空オーケストラ。

歩き続ける二人は、世間話をしている。

ある時、寄り添うパンダの仮面のお姉さんが歩みを止めた。香介も同じように立ち止まろうとしたが、おもうように足を動かせない。意思に反して前へ前へと進んで行く。首だけでも振り向こうと試みるが、視線は前方しか見据えさせてくれなかった。彼女の声が香介の後方から放たれる。

「実は私も長い間大好きなのよ」

彼女の姿をこの目で確かめられない大崎香介。彼女との心の距離が近づいた。けれども、彼女との肉体の距離は遠のくばかり。彼女と初めて出会ってから九年もの歳月が流れていた。ようやく念願が叶ったはずなのに、訪れた景色は思い描いていた景色には程遠かった。香介は、目に映らない彼女に伝えた。

「俺も大好きだよ！」

玄関の扉が開く小さな音がした。夢の記憶を細かく遡っていた香介は、現実世界で息をする一人の人間であることを実感した。こんな時間に誰だろう？ 母親は三日前に沖永良部島から帰宅している。今は二階で茜と一緒にぐっすり眠っているはずだ。父さん？

耳を澄ますが足音は聞こえない。不意に茜の乱雑な足音を思い出した。確かに扉は開いた。夢の世界では得られない持続した温もりを感じ取る。誰かが静かに部屋のドアノブに手を掛ける。香介、その正体を知っている。扉が少し開いて数秒してわずかに鼻息を吸う音がした後、扉は音もなく閉められた。光が差し込み、光が消えた。香介は父親の帰宅と共に現実世界にグッと引き寄せられた。ベッドから身体を起こし、首を数回まわした。意識を腑に落とした香介は時刻を確かめる。暗闇が許してくれない。立ち上がり、居間へ向かう。

台所に立つ大崎英明がコーヒーを淹れ始めている。彼の手元には二人分のコーヒーカップが用意されていた。

居間に現れた息子に父親が伝える。

「もっと弱々しくていいんだぞ」

息子は父親の伸びきった髭に不自然さを抱いたが、不自然なのは毎朝髭を剃っている自分の方だということに気がついた。

「おかえり」

「ただいま」と、父親が言った。

息子は座り慣れたソファに腰掛け、父親は黙々とコーヒーを淹れている。ふたりは一言も発さなかった。

ひとつの言葉を選び抜こうとする沈黙が、そこにはあった。

どんな暮らしだった？ なんて容易く聞けない。だってまだまだ夜は長いんだ。

そうだ、夢と現実の話をしよう。

孤独の話をしよう。

髭の話をしよう。

昔の話をしよう。

そうしよう。

聞いて貰いたいことが山ほどある。
見て貰いたいことが山ほどある。

見て見て！

葉山洋の姿が脳裏を過った。

私、今の彼氏と結婚する予感。

葉山翠と大崎茜の姿が脳裏を過った。

くたばるまで続けるつもりだよ。

大崎景子の姿が脳裏を過った。

実は私も長い間大好きなのよ。

パンダの仮面を被ったお姉さんの姿が脳裏を過った。

梅沢、もう子供三人だって……。

村島直晴の姿は現れることなく、
パンダの仮面のお姉さんがそのまま脳裏に焼き付いて離れなかった。

テーブルに二つのカップを無言で置いた父親はまだ座らない。
冷蔵庫へ足を運び、ミルクチョコレートを一枚手に取り、
息子が座る向かい側のソファアに腰掛けた。